

## 建築における身体性の回復

横山 聡



宮城県保険医療福祉  
中核施設コンペ案



熊本県立劇場  
(前川國男建築設計事務所  
での最初の担当作品)



青森市北国型集合住宅  
コンペ案

私はオペラが大好きである。昨シーズンは15回程行った。最近の公演で印象に残っているのは、昨秋のバイエルン国立歌劇場「トリスタンとイゾルデ」。ワーグナーは長いから、この公演も5時間半近くかかった。けれども良い舞台というものは時間を忘れさせるもので、あっという間にカーテンコール。年明けには、ベルリンドイツオペラがやってきた。ワーグナーの「ニーベルングの指輪」の連続公演だったのだが、続いて新国立劇場でも、その中の「ワルキューレ」をやった。同演目の国内外歌劇場の公演は好対照で面白かった。ベルリンは、90年代前半のプロダクションで、トーキョーは新作だ。作られた時代背景が反映されていたし、オーケストラも片や重厚で、一方は軽妙な音だった。

オペラをよく観るようになったのは、師匠の前川國男の影響が大きい。私はもともと音楽が好きで、小さい頃は音楽家になりたいと思っていた。ある時その入れ物＝劇場の方に魅力を感じてしまい建築をやりたいなくなった。東京文化会館は、前川國男の代表作であり、建築を学ぶ以前から好きだった建築のひとつだ。縁あってという他ないが、恩師の薦めで、その事務所に入るようになった。最初に担当したのが劇場だった。美術館、博物館、図書館をやって、最後も劇場。設計のための勉強ということで時間をもらい世界各地の劇場を廻ったりもした。社会人になった頃から、有力な歌劇場の引越し公演が頻繁に行われるようになった。人に誘われて通っているうちに魅力に取り憑かれてしまったというわけなのだ。

前川さんのお供で何度か文化会館の公演に行ったことがある。幕間に、ヨーロッパでの聴衆としての経験や、ウイーンオペラ座の舞台の構造等、様々なことを熱心に話してくれた。自分の設計した劇場で最高の舞台を観る。建築家にとって、これ程、至福の時はない。それを目の当たりにして、素晴らしい建築を創りたいと思わない者がいるだろうか。あれは前川流の建築家教育だったのかも知れないと今になって感じるのである。

さて、設計の仕事をはじめた1980年代以降、建築には様々な傾向が現われた。しかしこの間、変わらずに感じていたのは、非常に映像的な建築が多いということ。写

真では良いけれど、行ってみるとちっとも面白くない空間だったりする。私が実現したいと願うのは、視覚的快楽の追求だけに留まらない、身体感覚に訴えかけてくる、空間的喚起力を持つ建築だ。専門家の間で話題になっている建築が、思ったほど人々に感動を与えていないことが多い原因は、この辺りにあるように思える。

このことを考えるとき、コルビュジェのことが気になってくる。前川さんの師匠だから私にとっては祖父みたいな存在とも言えるが、彼は、地中海に面したカップマルタンという村に小さなアトリエを持っていた。ここで自然をスケッチしたり、海で泳いでいる写真が残っている。作品が持つ生命力の強さを説明する鍵はここにあるような気がしている。彼は、建築の作り手として人間の持つ身体性というものを忘れなかった。後期の作品には、海のエロスともいうべきものが宿っていて、その空間からは強い感動を受ける。現代の日常生活では、身体より精神の方が過大評価されがちである。海で泳ぐという行為はコルビュジェにとって、自分自身の身体性を回復する作業ではなかったか。

昔からの傾向として、どうも私は、視覚芸術より舞台芸術から受ける感動の方が大きい。そう言えば学生時代、哲学の世界は構造主義や記号学が全盛だったが、現象学の方に惹かれるものがあり、メルロ・ポンティエーの身体論的現象学などにリアリティーを感じていた。その傾向はどうやらずと変わっていない。舞台芸術は生身の人間が演じ、観客は五感を総動員してそれを受けとめる。都市生活者としての身体性の回復作業。それがオペラ通いの理由だと言いつつ、今週も劇場に足を運ぶのである。(よこやまさとし・非常勤講師)

### 筆者略歴

- 1956年 栃木県生まれ
- 1980年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1980年 前川國男建築設計事務所
- 1992年 ヨコヤマ・アソシエイツ設計研究所設立
- 1998年 日本大学理工学部非常勤講師



## 進路選択の前後

秋山 宏

### 筆者略歴

1939年 東京都生まれ  
1962年 東京大学建築学科卒業  
1967年 東京大学  
1999年 日本大学理工学部総合科学研究所



将来の進路を決定する進学振分けは、東京大学では入学後1年半頃に行われ、3日目からは専門課程に入った。重大な決断にしては、私の決断の根拠は極めて薄弱なものであったと思う。家系、少年時代の夢、世の中の趨勢、自分の能力・適性、友人の動向などが決断の背景となる。

私は千葉県の漁村で自然に囲まれて育ち、生き物に強い関心を持っていた。伯父が外科の名医であったこともあって、漠然と医者になるつもりでいたが、しだいに数学や物理に興味の中心が移っていった。昭和30年代になって日本の建設ブームが本格化し、その象徴は日ごとに天に向かって伸びてゆく東京タワーの勇姿であった。小学生の頃から、建設現場は何か暴力的で恐ろしく、しかし、遠まきにも眺めずにはいられなかった。戦後の焼野原から復興してゆく東京、その骨格をなす建築物が如何にして成立するかは大きな関心事のひとつとなっていた。また、それは数学や物理学の所産であると思われた。大学に入ってから驚かされたのは、同級生の学力レベルの高さであった。数学にはいささか自信があったので大いに競争心を煽られ、かなり勉強した。結局、数学が生かせると思って決めたのが建築学科であった。

当時は日本の鋼構造の成長期で、斬新で繊細な鉄骨立体トラス、鉄骨シェルに人気が集まっていた。それは本格的な重量鉄骨が現れる前の軽量鉄骨の一展開という意味を持っていた。シェル構造となれば数学や力学の定番がもっとも多いと考えて、卒業論文や修士課程では鉄骨シェルと取り組むこととした。

シェル理論は弾性力学の精華である。しかし、実際の設計問題は標準的な扱い易い形状のものばかりでなく、また、弾性設計ではもの足りない。非弾性領域を扱うには、弾性力学は突然に無力になってしまう。数値解析に全面的に頼るには当時の電子計算機的能力では無理であった。一方、非弾性領域の問題解決には実験は欠かせない。純数理的論理展開を武器にして鉄骨シェルの可能性を追求することは、余程の学力がない限り無理であることがしだいに分かってきた。

大学院にはいるとすぐに、実務設計のアルバイトの話が先輩を通して舞い込んできた。学校、教会、工場など

の構造設計である。当時は鉄骨構造の設計者は未だ極めて少なく、大学院生ともなれば設計者としての資格を備えているものと思込まれていた。実際は僅かの基礎知識のみで設計能力など殆どない。それでも期待に応えないわけにはいかない。学会規準等を読み漁ってとにかく形をつけるのである。鉄骨構造のみならずRC構造もいろいろと設計した。設計を重ねるにつれて、本質的な疑問が次々と湧いてくる。疑問に答える解説書の類いは殆ど見つからない。先輩にたずねても満足な答えは返ってこない。鉄骨構造では座屈と接合が重要である。座屈に細心の注意を払えば接合がおろそかになる。その逆も真である。接合に凝り過ぎると鋼材量がまたたく間に増えて設計にならない。RC構造では部材の振れを気にすると柱や梁の設計にも自信が持たなくなり、振れの専門文献を読むとますます不安が募り手の施し様なくなる。要は細部にあまり固執せず、バランス良く考えることが設計では肝要であるのだが、どうしても細部が気になって仕様がなない。設計は失敗の連続で、次の機会に前回の失敗を挽回しようとする、また新たな失敗が生ずる。学年が進み研究の方法が判りかけるにつれて設計のバランス感覚は増々失われてゆく。昭和40年代に入ると設計者の層も厚くなり、大学院生の設計アルバイトの需要も急速に減って、苦しい試練も漸く終わりを告げることになった。この体験から得たことは、設計と研究は互いに強い補完関係にあるが、その方法論は全く異なっていることである。研究と設計は両立し難いが、研究が設計に背を向けてはならないことである。

やがて設計か研究かの選択を迫られ、研究の途を選んだ。当初の数学・力学を駆使して新たな鉄骨シェルの体系を構築する夢は急速に後退し、鋼構造の基本問題に取り組む、鋼構造の真の理解に到達したいという願望が強まった。多方面に目を配る設計者を支援する為には研究成果は本質的かつ単純明快であることが必要である。気がついてみれば、私の研究は我国の構造設計を支配する耐震問題を専らとし、2次方程式より高度な数学を用いないものになっていた。(あきやまひろし・教授)